

7. 南北朝時代

建武元（1336）年に後醍醐天皇が吉野に移ってから、後亀山天皇が京都にもどって南北朝が合体した名徳3（1392）年までの57年間、吉野の南朝と京都の北朝とが争った時代を南北朝時代といいます。



○ 足利尊氏が甲宗八幡宮に荘園を寄進

建武3（1336）年、新田義貞・楠木正成らの軍に敗れた足利尊氏は、船で瀬戸内海を西に逃れました。

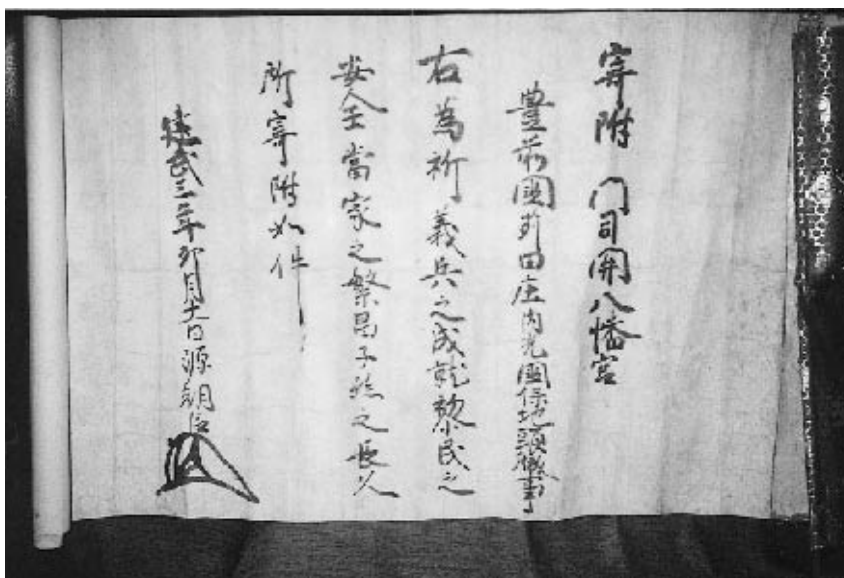
その後、京都を奪還するために、門司氏や筑前の少弐氏などの北部九州の武士団を率いて、博多の浜を船出しました。

途中、赤間ヶ関に船団をとどめると、尊氏は使者を甲宗八幡宮（門司区旧門司）に送って、苜田荘（福岡県苜田町）の寄進状を届けさせ、戦勝を祈願しました。

その後、尊氏は鞆ノ浦（広島県三原市鞆ノ浦）で、海路軍と陸路軍に兵を分け、弟・直義に山陽道を東に進ませました。また、自らは海路軍を率いて湊川（兵庫県神戸市）で待ち受ける新田義貞・楠木正成の両軍を撃破しました。

すると、後醍醐天皇は南の吉野（奈良県吉野郡）に移り、吉野朝廷（南朝）をつくりました。

これに対して尊氏は、京都に光明天皇を立てて、京都朝廷（北朝）をつくりました。さらに、自らは征夷大將軍に任じられて、京都に武士の政府・足利幕府（足利3代將軍・義満の代からは「室町幕府」）をつくったのでした。



甲宗八幡宮に届けられた寄進状

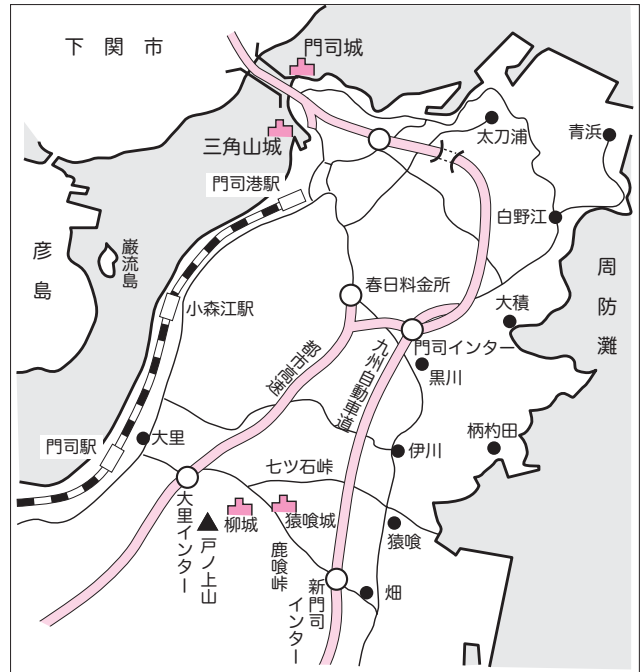
○ 門司（企救）半島を北朝方が制圧～猿喰城の攻防～

猿喰城は、標高200mほどの大久保山頂にありました。

猿喰城下の峠を「七ツ石峠」といいます。この峠を関門海峡側から城山霊園を抜けて登って行きますと、左手の崖の上に七つの自然石が、真向かいの猿喰城跡を見つめるように並んでいます。



七ツ石峠に建つ木碑



猿喰城周辺の地図

この七ツ石峠には、次の七将亡霊伝説があります。

＜七将亡霊伝説＞

昔といっても、いつのころなのか、全く分かりませんが、この付近で戦いが行われ、この時に七人の武士が討ち死にしました。

それからというもの、この峠に馬上姿の武将の幽霊が夜ごと現れるようになりました。

こんなわけで、峠を通る人々やこの峠に住む村人たちは、すっかり困り果てていました。

このような時に、となり村の玉泉寺に、偶然、ひとりの高僧が大寧寺（長門国…現在の山口県）から来ていて、亡霊の話を知りました。

「それは難儀のことじゃろう。お経をあげ、御仏様のお力で霊を慰さめて進めよう」

その僧は、七つの石を建てて墓とし、お経を一心不乱に唱えました。

その後は幽霊の姿も、この峠から消え去ったということです。



七人の武将とは、猿喰城の攻防で討ち死にした南朝方の親頼ら6人の武将と、北朝方の親通だと考えられます。

当時の門司も、南北の2大勢力に分裂していました。

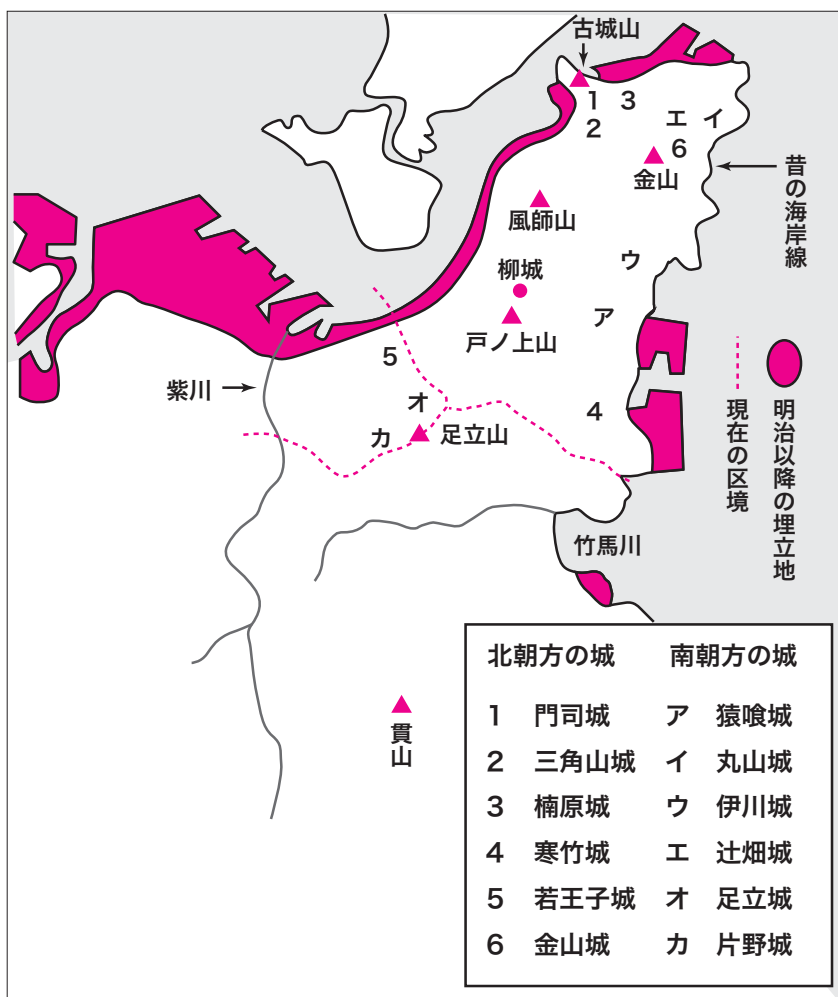
猿喰城の攻防は、南朝に味方した猿喰城主の親頼と、北朝方の味方をした柳城主の親通との戦いでした。

猿喰城は、敵味方入り乱れてのはげ激しい戦いの場となり、親頼と親通は、ともに落命しました。

猿喰城合戦は、親頼の南朝政権の夢を打ち砕き、企救郡を北朝一色にしました。そしてまた、九州南朝の勢いを止めて、九州全体を北朝一色に染め上げる結果をもたらしていくのでした。

足利義満による南北合一は、この猿喰落城の約30年後の正中9(1392)年10月のことでした。

日本の歴史から見ますと、猿喰城落城は、南北朝対立の終わりを予感させる事件だったと考えられます。



南北朝に分裂した当時の城の位置



猿喰城跡に建つ石室と石碑▶